

# 友の会だより

第7号



盛田命祺翁陶像  
(常滑市小鈴谷白山社境内)



溝口 幹先生頌徳碑  
(常滑市立小鈴谷小学校内)

# 室町時代の常滑窯業

赤羽 一郎



## 1. 有徳人と乞食

室町時代の期間については学説の分かれるところですが、後亀山天皇から後小松天皇へ、つまり南朝から北朝へ神器が譲り渡された明德3年

(1392)が始まりであり、織田信長が將軍足利義昭を京から追放した天正元年(1573)をもって室町時代は終わったとする説が一般的です。

この室町時代を端的に表現した言葉として、脇田晴子氏が『室町時代』(中公新書)でしている「有徳人と乞食」がふさわしいと思います。当時の史料によっても、乞食と坊主が街で数多くみかけられたようですが、富める人と貧しい人が混在し、貧富の格差が非常に大きかった時代であったのでしょう。人間を土地にしばりつけた古代の律令体制は平安時代後期には弛緩し、全国各地に荘園が形成されます。各地の土豪が広い土地を囲い込み、政治・経済面での支配を行ったのが荘園ですが、この荘園の中で農業や手工業の振興が図られたのです。知多半島における中世の陶器生産も、荘園の経済活動の一環として営まれてきたのです。このような荘園という枠の中にいる限り、人々は身分上の一定の保証を得て、大変な労苦を伴いますが安定した生活ができたのです。しかし、鎌倉時代後半から銅銭の使用が進み、商品経済が活発になり、それまで自給自足的な生活が営まれていた農村地域も変動期を迎えることとなります。また、南北朝の動乱や室町時代に頻発した戦乱に

よって、人の動きが今までにないほど広範囲にわたり、土地と人との結びつきが希薄になったのです。

このような状況の下に、商品経済に携わる手工業者や商人は農村を離れ、都市を形成していくのです。また、商品経済の活発化は、一方では富豪を生み、他方では飢饉などの災害に苦しみ、流浪人となって都市に流入する人口を増加させたのです。

さて、室町時代の都市の形成は、人々の日常容器としての陶器の需要を増大させます。

知多半島の陶器生産も、このような状況に対応して生産活動を活発に行っていますが、室町時代中期以降に窯が現在の常滑市街地に集中していきます。この集中の時期とその要因を、これから考えてみたいと思います。

## 2. 近世常滑窯の源流

知多半島には約800基の古窯跡が確認されています。人知れず滅失したものと未発見のものとを加えると、中世をとおしておよそ1,500基の古窯が次々に火焰を吹きあげていたものと想像されます。そこで、分布調査や発掘調査によって操業年代が判っている古窯跡数と、全国各地から発見された常滑窯製品数を表にまとめてみました。

まず、表の見方から説明していきます。古窯を大きく山茶碗窯と甕窯とに分けてありますが、前者は山茶碗・小皿を専ら生産した古窯を、後者は壺・甕、鉢を主製品とした古窯を指しています。常滑窯と同じく古代猿投窯の技術を継承

期	区分		窯 数		出土遺物数
	西 暦	山茶碗窯	甕 窯		
I	1,100～1,150	21( 7 % )	10( 4 % )	16( 2 % )	
II	1,150～1,250	258( 88 % )	136( 51 % )	261( 27 % )	
III	1,250～1,350	30( 10 % )	94( 35 % )	294( 31 % )	
IV	1,350～1,450		23( 9 % )	231( 24 % )	
V	1,450～1,550		2( 1 % )	138( 14 % )	
VI	1,550～1,600			21( 2 % )	
		304(100 % )	265(100 % )	961(100 % )	

知多半島の古窯跡数と全国出土遺物数(1989.11現在)

して生まれた瀬戸窯にも、山茶碗窯と灰釉・鉄釉をかけた施釉陶器を焼成した窯とがみられます。出土遺物数は、全国各地から発見されている常滑窯製品を年代別に分類したものです。近年は全国的に発掘調査が増加し、中世集落、墓跡、城館跡などで、常滑窯製品が数多く発見されています。現在までおよそ760ヶ所の遺跡で常滑窯製品を確認しています。ひとつの遺跡から複数の年代のものが発見されている場合は、各々の年代に1を加えています。したがって出土遺物数は表の数字をはるかに上回っているでしょう。また、山茶碗・小皿・鉢類については、常滑窯のほか中世猿投窯、瀬戸窯、渥美窯はもちろん、尾北窯、湖西窯などでも生産しており、発掘調査報告書の内容だけでは判別できないことが多く、表の出土遺物数からは全て除外してあります。つまり、表の出土遺物数は、壺・甕・瓶類に限定した数字であると理解してください。

さて、この表からふたつのことが指摘できます。第一に、I・II期と甕窯数を上回っていた山茶碗窯はIII期には急減し、次のIV期には全くみられなくなることです。知多半島における山茶碗窯の分布状況を見ると、I期とII期前半の山茶碗窯は半島北部に多く、II期の後半からIII

期前半の山茶碗窯は半島中央部から南部にかけて多くみられます。私は、III期の前半、つまり13世紀末で知多半島から山茶碗窯は姿を消したと考えております。この時期は、三筋壺、水瓶、短頸壺といった宗教的性格を帯びた器種が常滑窯で生産されなくなった時期でもあります。つまり、13世紀の後半は、常滑窯が古代の様相を払拭し、壺、甕、鉢を専ら生産す

る中世窯としての性格を強めた時期にあたります。このことと山茶碗窯の消滅は無関係ではないと思います。

第二に、甕窯と出土遺物の比率のズレです。先にも述べたとおり出土遺物は壺・甕、瓶類に限定してピックアップしましたが、これらの製品は大半が甕窯で焼成されているものです。したがって、年代別の甕窯と出土遺物の比率が同じように推移してもよいのですが、表でみるようにズレがあります。出土遺物数が必ずしも陶器生産の実態を表現しているとは考えておりませんが、特にV・VI期のズレが大きいです。この理由としては、①V・VI期に窯が集中したと考えられる常滑市街地付近に元来多くの甕窯があった。(現在は消滅した、又は住宅等の下で確認できない。)②甕窯数は多くないが、窯体が大型になり、多くの陶器を焼くことが可能となった。③窯の焼成効率が向上し、完成品を多く得ることができたことなどがあげられます。いずれにしろ、この時期の窯の実態が不明ですので、①～③は可能性がある事柄とするにとどめておきます。

### 3. 近世常滑窯の胎動

平安時代末期(12世紀初頭)に知多半島で

開始された陶器生産と、窯が常滑市街地付近に集結して行われた陶器生産を連続的なものとみるか、特に後者を区別して考えるかは議論の分かれるところだ。ここでは結論を急がず、常滑市街地に窯が集結した理由から考えていきます。その理由として、まず燃料の確保の仕方の変化があげられます。Ⅰ～Ⅳ期の陶工は、燃料となる薪を窯の周辺から獲得し、操業期間が長くなるに従って、その領域は同心円的に拡大したと思われる。そして、その領域が労力の限界まで広がった段階で、窯はあらたに燃料の豊富な場所へ移動したと考えます。知多半島のほぼ全域に古窯跡が分布しているのは、このパターンが繰返された結果でしょう。しかし、大型甕の焼成に伴って巨大化した窯の燃料を確保すること、更に燃料を求めてあらたに窯を構築することは至難のことです。そこで、窯を一箇所に固定し、燃料を確保することが創案され、海岸に近く松葉等の燃料を船で入手しやすい常滑の地が選ばれたと考えたいのです。窯が常滑に集結した理由として、次に商品である陶器の流通手段として、海運との連携を図ったことがあげられます。知多半島全域に窯が分布していたⅠ～Ⅳ期の陶器の運搬でも海運が威力を発揮していたことは、全国各地の常滑窯製品の出土状況をみれば容易に推測できますが、積み出し港は必ずしも明らかではありません。Ⅴ～Ⅶ期には、大型甕の需要の高まりと同時に、常滑と同様に大型甕を生産し各地へ供給していた備前窯の著しい台頭ぶりが目につきます。この備前窯の台頭が、常滑窯に一層の海運の活用を促したことも十分想定されます。

この二つの理由に加えて、知多半島の陶工群が、陶器生産体制の革新を迫られたことをあげておきます。むしろ、この理由が最も重要な事柄かもしれません。冒頭で触れましたが、室

町時代にはって商品経済が活発化するに従って、手工業者や商人が都市を形成するようになります。また、これら商工業者は「座」などの自治的組織を結成するのです。これは、村落共同体から離脱して不安定な立場にあった彼ら商工業者がその生業を既得権するためのものと考えられます。このような動きが知多半島の陶工にもあったと、私は考えております。同様な現象は瀬戸の陶工にも見うけられます。室町時代中期以降、瀬戸の陶工があいついで山づたいに東濃地方へ移動していきますが、この現象が、「瀬戸山離散」といわれるものです。この陶工の移動も、瀬戸一帯の燃料や良質陶土の枯渇も原因としてあげられますが、あらたな生産体制をつくりあげるに適した東濃地方を目指したことが想定されるのです。室町時代中期末（15世紀末葉）に東濃地方で半地下式大窯が登場したのは、あらたな体制をつくりあげた彼らに負うところが大きかったのです。

#### 4. 中世から近世へ

いままで、窯の移動のことに時間を費してきましたが、最後に製品にみられる変化について触れておきます。近年、戦国期（15世紀末期～16世紀中葉）の城館跡の発掘調査がさかに行われ、常滑窯製品も表に示すように数多く発見されています。とくに大甕が大半を占めていますが、これらの中に、褐色の器面に光沢があり自然釉が白濁しているものがみられます。また、甕の下胴部に環状の付着痕（環状痕跡）があるものも多くみうけられます。これらの特徴のうち光沢や白濁釉は、塩分を含んだ燃料を用いたり、家屋などの廃材（とくにワラやカヤのような禾本科（イネ科）のもの）を燃料として手当たり次第使った結果ではないかと思えます。つまり、窯が常滑市街地に集積してからの製品

と考えられるので  
す。一方、環状痕  
跡は、底部が極端  
に小さく、高さ胴  
径とも大きな甕を  
窯内で安定して据  
えるために、筒状  
の焼台に甕の底部  
を挿し込んだため



天正18年(1590)落城の八王子  
城趾から出土した陶器2点。

っていたと思わ  
れます。むしろ  
安永年間頃(18  
世紀後半)には  
完成していたと  
いわれる『張州  
雑誌』に描かれ  
た窯に近いもの  
と考えます。

にできた痕跡ではないかと考えています。中世の穴窯は地中にトンネル状の穴を穿ち、焼成室の昇り斜面に粘土塊を置いて焼台としていました。しかし、環状痕跡は、このような焼成技術ではなかったことを示唆しています。また、光沢を帯びた褐色の器面は、酸火焰焼成であることも示しています。これらのことから、先に述べた特徴をもった製品は、穴窯構造ではなく地上式もしくは半地下式の単室の大窯で焼成されたもの、と私は考えております。この点15世紀末葉に、東濃地方で半地下式大窯が登場したと類似しており、興味をそそられます。ただ、窯の構造については、常滑のそれは全く不明ですが、東濃地方の半地下式大窯の分焰柱とその両側に狭間(サマ)機構をもった構造とは異なる

赤羽一郎氏略歴 昭和18年(1943)長野県生れ。愛知県教育委員会文化財課主任。

著書に日本陶磁全集8、世界陶磁全集3、日本やきもの集成2など多数。

以上、室町時代を中心に知多半島及び常滑における陶器生産について述べてきましたが、知多半島古窯跡群である中世常滑窯と、今日に続く近世常滑窯(私は、これを意図的に常滑焼と呼ぶようにしている)との画期は、常滑市街地に陶器生産が集約され、かつ、それまでの穴窯から地上式単室大窯へと転換された時期に求めたいと思います。その時期は、城館跡出土の常滑大甕の年代推定などから、室町時代中期末(西暦1500年前後)と考えています。また、このような画期は常滑のみならず、瀬戸も含めた中世から近世への移行をなしとげた陶器生産地にあてはまるものと思っております。

〈この稿は、1989年11月12日の講演の内容を加筆し、整理したものです。〉

## 鈴溪義塾の教育と周辺



鈴溪義塾が創立されてから百年を経た。この義塾が創設されたいきさつは、明治20年に制定された小学校

小鈴谷小学校 斉田茂夫  
令により、高等小学校(尋常小学校4年の上にある4年制の学校)は一郡一校のみ設立でき、他村では、建てることができなかった。したがって、当時は、半田の知多郡衣が浦高等小学校でなければ、教育は受けることができなかった。そのころは、交通不便の時代である。このままでは、郷土を担う子弟の教育が弱体

化すると考え、盛田命祺と溝口幹は、私立の高等小学校を設立することを決意し、盛田命祺の私財により、明治21年(1888)4月鈴溪義塾が誕生した次第である。

その後、勅令により、校名変更がなされたが、昭和初期まで、この鈴溪教育は継続されその薫陶を受けた人々の中から、幾多の偉人を輩出するに至った。

このことについては、後述することにし、因みに、このゆかしい「鈴溪」の名についての言い伝えに少し触れてみる。

昔、時の領主が鷹狩りをしていた折り、可愛がっていた名鷹が行方不明になり、八方手を尽して捜したがわからなかった。しかし、この地へ来て、鈴の音が聞こえ、そこに件の鷹をみつけることができた。その時から、この地を鈴の谷と呼ぶようになり、現在の小鈴谷に至っているのである。従って、「鈴溪」は小鈴谷の別名である。

さて、以下、鈴溪義塾について、創設者と当時の教育、鈴溪が育てた偉人の順で概略を述べる。

### (1) 盛田命祺翁

盛田家九代目久左エ門の第六子として文化13年(1816)に命祺は生れた。幼名を常助といたが、早逝した兄の後を継いで11代目久左エ門となった。

盛田家は、「子の日松」でよく知られる酒造家であると共に、すでに、関ヶ原の戦いのころから栄えた豪農でもあった。

代々の当主は、慈善の心が厚く、村人から尊敬され、信頼されてきた。

命祺も、代々の当主以上に多くの人々を助けた。特に天保の大飢きん(1836)には多くの米や麦を出し、全力を尽して村人を救った。その他多くの公益事業を手がけた偉業について、

広く中央まで聞こえ、明治天皇が名古屋巡幸(明治11年1878)の折りには、岩倉具視右大臣を勅使として、「尾張には、尊王の田宮氏あり、民間においては、盛田氏が済民の事業に務めている希くは自重せよ。」との御言葉を賜わり、羽二重を下賜された。

その後、荒地の開拓、ぶどう酒製造にと進取の気に満ちた業績を称え、藍綬褒章を賜わった。

話は前後するが、命祺は、幼少から学問に対する熱意が厚く、坂井の伊東桐斎、上野間の大仙寺紹瑄和尚等に漢籍を学ぶかたわら、自ら南畝と号し、書画をよくものした。

また、永平寺森田悟由禅師から受けた禅の心も身につけた。従って、当代一流の文化人でもあった。そのため、福沢諭吉、品川弥二郎、井上馨等、多くの文人墨客と親交があった。このような人格である命祺は、人を見出し、育てることも実に優れていた。その一つに大教育者、溝口幹の起用が挙げられる。

(明治27年4月4日 命祺翁没 享年79才)

### (2) 溝口 幹先生

伊勢神宮祠官の子として嘉永5年正月(1852)伊勢、宇治山田に生まれる。

幼少より学問に秀で九才にして、す

で漢籍をものにした。また、その頃から、珠算、数学、簿記なども得意としていた。

このような幹の秀れた素質を、盛田命祺(当時は11代目久左エ門)が見逃すはずはなかった。幹の父林平に請い、明治5年(1872)小鈴谷郷学校の教員として招いた。しかし、命祺は、幹の素質を田舎に埋れさせるのを惜しみ、東京・大阪・天津の各師範学校で遊学できるよう援助した。



幹は、命祺の厚情に報いるため、日夜、勉学に励み、2年間で、3つの師範学校を終え、28才の若さで大津師範学校の4等教授に任命された。

しかし、命祺の恩に報いるため、大津師範学校の教授達に惜しまれながら、小鈴谷学校に明治13年(1880)に帰任し、明治20年(1887)同校校長となり、明治21年鈴溪義塾を創設し、塾長となる。以後、明治43年(1910)まで、鈴溪の教育に尽した。

幹の日記をひもとくと、彼は、毎日、欠かさず教育の研さんに励んでいた。

漢籍はもちろん、英語、ドイツ語、簿記、物理、化学等広い分野に亘り、自分が得た知識を子弟の教育に注ぐと共に、訪れる教育関係者にも惜しみなく分ち与えた。

従って、鈴溪義塾の教育は、現在から見てもはるかに高い水準の内容を持っていた。

子弟は、尋常小学校4年を卒業してから後4年間、この義塾で学んだ。そして、義塾を卒業して、更に上級学校に進んだ人々は、一様に、その学校の教育は、義塾の復習のようなものであったと語っている。

また、幹の日常生活は、彼が教育方針に掲げていた「質実剛健」そのものであり、書を楽しむ、草花を愛した日々を送った。また、村人に自筆の教育勅語を与え、村人の気風浄化に大いに努力したため、人々から慕われ、今でも、その名残りが各公会堂に残っている。

(昭和8年1月 溝口幹先生没 享年82才)

### (3) 鈴溪義塾を巣立った偉人たち

(順不同)

文学博士(言語学)石黒魯平、宮家菩提寺・京都光雲寺住職稲垣乾同、トヨタ自工会長石田退三、海軍中将古川四郎、戦艦大和艦長・海軍

中将森下信衛、文部事務次官伊東延吉、敷島パン創業者盛田善平、今でも元気で活躍されている元文部省体育局長(東京オリンピック総括責任者)前田充明、その他、学者、財界人については枚挙の暇がない。

以上、鈴溪義塾創立後百年を期にして、貧弱な知識をもとに概略を述べてきた。

ともかく、鈴溪教育は教育史には表われなないが、実に優れた教育をこの地にもたらした。

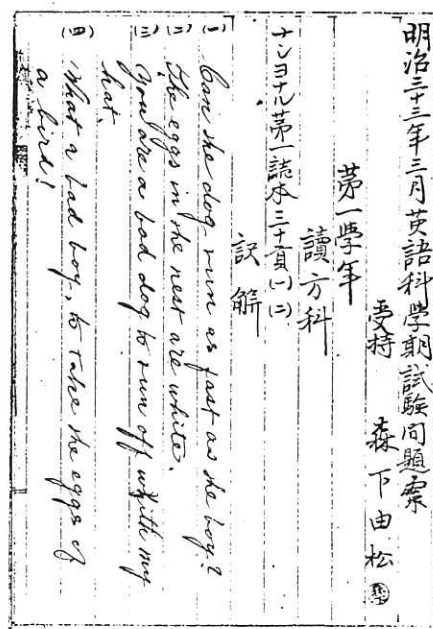
この教育は、まさに師弟同行、溝口幹先生と起居を共にした全人教育そのものであった。

こうして筆をとる不肖も残された資料を見る度に自責の念をかきたてられる次第である。

(文中敬称略)

### 英語の試験問題の一部

(明治33年3月)



## 呂号兵器の推薬生産と耐酸坩堝

元海軍技術中佐 貴田 勝造

大学を出て召集を受け、四日市（第二海軍燃料廠）や徳山（第三海軍燃料廠）勤務を経て、太平洋戦争中は海軍省にいて、主に燃料関係やその設備関係の資材調達に携わった。

呂号兵器の生産開始で、陸海軍合同の特薬部に籍を置き、大阪や九州、名古屋などに駐在する海軍監督官を総括した。

名古屋には大津橋脇に海軍大佐をトップにして4～5名の監督官が常駐し、常滑には山本海軍大佐が駐在して耐酸坩堝の生産を指導した。

㊤（呂号兵器の防課名）の始まる前から飛行機燃料のオクタン価を上げるための、耐爆剤用原料の臭素を入れる臭素瓶が大量に必要で、耐酸坩堝製品を使用していた関係から、㊤の生産決定で甲液（95%濃縮過酸化水素）を入れる容器として、急遽発注したら、よく焼け締らないものがたくさん来て、使いものにならなかったことが多かった。95%濃縮過酸化水素は、硫酸を電解して過硫酸にし、これを熱分解して過酸化水素にし、それを濃縮してつくる。

しかし、濃縮までは普通の耐酸品でよいが、これを濃縮してゆくと、鉄が触媒になってすぐ分解してしまう。陶磁器の原料に鉄分の無いものはない。したがって強く焼き締った陶磁器でなければならなかった。その内にマレーシャから入手できる錫で鋳物の容器をつくることを考え、貯蔵は殆んど錫製を使用した。

**貴田勝造氏略歴** 東京帝国大学応用化学科卒業、海軍技術少佐、戦後、日本碍子株式会社（現日本ガイシ㈱）専務取締役歴任、現在愛知厚生年金受給者協会会長 73歳



薬液は東京都内の飛行場5か所に地下格納庫をつくって貯蔵した。

この貯蔵も、精々トラックに積むオイルタンク程度の大きさの容器に錫張りしたものを使い、焼きものは使用しなかった。

この薬液を輸送中、東海道線の平塚駅で大爆発を起し、一列車全焼したことがあったが、詳細は全く分らないまゝになった。

しかし、薬液の生産は割合順調にすゝんだが、飛行機の生産が遅れた。

呂号兵器がうまく完成したら、爆弾を積んで体当りでゆく計画だったらしい。

昭和19年暮れの東南海地震で、常滑の窯の煙突が全部折れ、この復旧資材の調達に奔走した。そんななかで、常滑でも多くの人々が大変苦勞したと思われるが、ミッドウェー海戦以後の急激な頽勢は挽回の余地がなかった。終戦時、海軍省に電解槽の電極に使う白金が大量にあった。白金を溶かしたシート状のものに混じって供出されたまゝの指輪などもあった。

紛失しないよう厳重に荷造りして米軍へ渡したが、朝鮮でまとめた白金は、監督官が持って鳥取まで来て、盗難を防ぐため或る寺院に預けたことから密告されて、警視庁に拘束される破目になり、我々の説明で釈放されるというハプニングもあった。

ともあれ、これが呂号兵器の最後に残した話題かも知れない。



## 秋の美濃路を訪ねて

肥田花子

友の会恒例の見学会はこの秋も定員を上回る希望者でしたが、係の方々のお骨折で全員参加出来ました。11月16日片山会長以下44名、折りからの雨空の下、賑かに出発。行程通りまず大矢田神社へ。此処は孝霊天皇（7代）の御名も記されている程の古い由緒の神社。祭神は建速須佐之男命とあり、奈良時代の創建とか。長い参道の周りには巨木が鬱蒼と繁って、千数百年を経て来た深山にこもる靈気がひしひし身に迫る思いです。急坂にさしかかる手前

に仏式のような山門が、仁王様を両脇に置きどっしりと構えています。幾星霜を風雨にさらされ、侵蝕風化著しいものですが、神域に一層の厳かさを思わせます。中腹の右手に赤い小造りな鳥居が点在して稲荷様が祀ってあるそうです。鮮かな朱色が印象的でした。高い石段を登り詰めて頂上の神殿に額づき改めて見渡す広大な杜、その緑の杜にも拜殿の前にも一際濃い緑の楓が目鮮かです。色づく事も散る事も忘れたような美しい緑に感嘆の声しきり。夜明けの冷気と日照のタイミングが良くないと美しい紅葉にならない微妙な植物の営みに神秘が感じられます。その点今年は期待外れの秋のようですが、晩秋の緑もまた良し。頂上から少し降った中腹の左手に、その昔天王山を襲った集中豪雨、雨に流されたと言う小山のような二つの大岩が鎮座していて、それを荒魂の岩、和魂の岩と名付けて祀られています。

次は刀匠の里。此処では古式豊かなしつらえでトンテンカンと昔乍らの鍛冶の実演を見



大矢田神社前にて（岐阜県美濃市）

ゆく秋の大矢田神社のみち谷  
紅葉遅れて陽に青く透く

水野美代子

せて頂きました。白装束に身を固めた刀匠がみこ轡おこで火を熾し乍ら、焼きを入れては打ち、打っては焼きを入れる。真赤な炭の炎に照らされて、気魄のこもったその姿に只々見惚れる会員一同。次の部屋では居合斬の妙技拝見。一瞬の間に斜斬りした青竹の鮮かな切口。記念にとその一節竹を我も我もと買いました。

見学会の楽しみの一つの昼食は此処で頂きました。温かい鍋料理をつまき乍ら交流を深めるひと刻、これも大切なことです。この後刃物センターで土産物の物色、常滑人は買好きとよく言われますが、お客あつての商いで売る方も必死。つい乗せられて買い過ぎるのも常滑の人の良いところ。幸いお天気も明るくなって来て、午後は新長谷寺しんちやうこくじへ。此処の山門は古さにおいては大矢田神社に一目置きますが、大きい事は一廻り大きく堂々と聳えて見上げる

ばかり。阿吽の呼吸宜しく仁王様ががっちり門の両脇を固めています。当山は貞応元年（1222年）弘法大師第4世の法孫護忍上人が大和の初瀬の長谷寺に参籠修業の砌、夢に現れた観世音のお告げに驚き帰庵すると、留守の間に霊木を持った人が訪れ「吾は長谷寺の者だが本尊を庵主に与える」と言い、端麗な観音像を置き去った。その後上人はこの観音の霊力によって広大な寺領を得、七堂伽藍と子院を建立する事などによって名声をいや高めたとの事です。時の帝、後堀河天皇の眼疾を祈願による平癒の功を賞せられ、新長谷寺の寺号を賜わり大きく寺運が栄えたが、室町時代の政争の兵火に焼き尽くされるなど、興亡幾度を繰り返し現在に至ったとの事。

境内は5千坪あり七堂伽藍(本堂・鎮守堂・大師堂・阿弥陀堂・釈迦堂・客殿)は国の重文で、重要宝物は数え切れぬ程夥しく、優雅な中庭は名庭園指定、また檜皮葺の三重塔は住持の自慢とするだけに華麗荘厳さは見る程に素晴らしい。また悲運の武将源義朝の念持仏の阿弥陀如来像も安

置されています。それにまつわる話は省略して最後に関の民俗資料館を見学。此処には刃物に関わる品の一切が展示され、中でも、名工と言われる刀匠の遺作の刀剣類は愛好者の垂涎的。

百聞は一見に如かず。今回御都合悪く参加出来なかった会員の方に機会があればお出掛け下さいと申し上げたい程充実した見学会の一日でした。



新長谷寺の三重の塔  
(岐阜県関市)

## 資料の調査作業大巾にすゝむ

協力部会 村田正雄

常滑市民俗資料館には、国指定有形民俗資料の1,655点を始めとして、その他にも数多くの常滑窯業民俗資料が、資料館の収蔵庫、大曾収蔵庫、陶芸研究所などに収蔵保管されており、その内の191点が本館のメイン展示場に公開展示されております。これら数多くの窯業民俗資料の内、メイン展示場に展示されている展示品は、ほとんど昭和54年の資料館開館当時のまゝに展示されていますので、現在では展示資料や、展示内容について修正や検討すべき必要が生じている点も発見されてきており、再来年度の資料館開館10周年を迎える事を機会として、現在の

メイン展示資料の191点について、それらの名称、時代、製型方法、用途、作者、資料寄贈者、資料採集場所など資料に関する明確な知識の調査や研究などを毎月の資料館協力部会でそれらの調査作業を行って来ている実情です。これらの調査や学習事業は昨年4月に長谷川館長の御指導を受けて発足したものであり、従って現在の協力部会の事業目的としては、開館10周年記念の特別事業として必要な各種類のリーフレットや資料目録、資料説明書、などが必要のためそれらの準備のための展示資料に就いての基本作業を行っている現状です。

なお、「資料館協力部会」という名称は、事業の内容が分りにくいという御意見もありますので、その点も部会で検討致したいと存じております。当部会としては、常滑の窯業の歴史や

民俗を実物の資料を通じて毎月学習を行っておりますので、友の会の皆さん方の多数の御参加御協力をお待ち致しております。

## 一枚の文書

古文書部会 北川 副夫

読めない悲しさに挑んで今やと比較的にわかるようになって来たと思う。古文書は根気のいる仕事であると云える。むつかしいと考えると、むつかしく思えて来る。これでやる気が無くなる。「よし、読んでやろう」と思わずに、「慣れてやれ」と考えれば楽です。慣れる事にも努力が必要かもしれませんが、だんだん一字ずつ覚えられます。その積み重ねが知らない内にわかり、内容も見えて来ます。そうすると面白くて止められなくなります。時の移り変りによる当時の様子がわかり、こんな習慣が有ったんだなと思わずニヤッとする事にも出会います。年々の作物の出来ぐあいも一枚の文書が教えてくれ、人々の生活が偲ばれます。

平野家(大野)の数多い文書の中に一通の借用証文が有ります。藩の軍用金を一ケ年限で金壺千両という大金を借りています。担保を入れて其の年の年貢米を納めた残りの分から払われており、完済となっています。ところが再び同じ条件で再拝借として金壺千両を借りています。軍用金は非常の時はずぐ返さなければなりません。時は慶応の年、何んに使われたのだろうか? などです。慶応は4年9月に明治と変ります。この借金は明治に入ってから返されていると附記が書き込まれ完済となっています。

富本家(常滑)の文書には命の次ぎに大切に旅した「往来一札」が有りました。これを懐に抱いて再び帰る事が出来ない覚悟の悲しい

病身の巡礼の姿を描き出し目頭の熱くなる思いもしました。今は、大野の廻船総庄屋であった中村家の文書に部員一同で取り組んでいます。

中村家の初代は、三河の田原の住人で主人の供をして尾張へ来た武士で知多郡大野庄へ根を下した人です。町人となって知多一円の船々の取締りに当り苗字帯刀を許された家柄です。大きな夢を抱きながら時のうつり変りに流されながら夢もしぼんでゆく姿が感じられます。鮮かな墨の色、筆運びの美しさに触れる事もあります。読み解けた時の嬉しさはお互いにニコリと笑顔を見せ合うだけで通じあう満足感です。

私達の古文書部会も四月から初心者向の講座を再び始めます。部員が総がかりで面倒を見る事になっています。奮って参加して下さい。待っています。



## 表紙紹介

盛田命祺翁は、文化13年(1816)愛知県知多郡小鈴谷村(現常滑市)に生れ、長じて11代目盛田久左衛門を襲名、家業の酒造業を営むかたわら、地域の振興に努めた。

溝口<sup>みき</sup>幹先生は、嘉永5年(1852)伊勢山田(現三重県伊勢市)に生れ、明治5年(1872)その俊秀を盛田命祺翁に見出だされて、小鈴谷郷学校の教員として招聘され、

次いで東京、大阪、大津の各師範学校に遊学した。

明治21年(1887)盛田命祺翁の私財で設立した鈴溪義塾において、子弟の教育に尽粋し、多くの日本的な人材を育て上げた。

盛田命祺翁、明治27年(1894)没。

享年79歳。

溝口幹先生、昭和8年(1933)没。

享年82歳。

## 平成2年度会費をご納入ください。

本年度(平成2年4月から3年3月まで)の会費を、ご納入いただく時期がまいりました。

については、ご面倒ですが直接民俗資料館の窓口へお払い込みくださるか、同封の郵便振替用紙に所要事項をご記入の上、最寄

りの郵便局へお払い込みください。

(振替番号=名古屋4-101508番)

会費は普通会員は年額1,000円、賛助会員は年額5,000円以上です。

なお、この際お知り合いの方にも精々ご加入をお勧めください。新規のご加入を歓迎しております。

平成2年3月25日発行  
発行 常滑市民俗資料館友の会  
常滑市瀬木町4丁目203番地  
TEL <0569>34-5290  
有線 54-429  
印刷 有限会社 興起社